

(様式第9 別紙2:公開版)

養成技術者の研究・研修成果等

1. 養成技術者氏名: 成田 真一

印/署名

2. 養成カリキュラム名: 産学官連携・技術移転プログラム

3. 養成カリキュラムの達成状況

大学における研究成果を発掘・ヒアリングを行い、その特許性と市場性を中心に産業化への可能性を検討、権利化を行い、産業界へのマーケティング・ライセンス交渉を行う。こうした当初予定されていた一連のカリキュラムについては、ある程度達成できたと思う。

ただ、権利関係が複雑な案件や厳しい条件下でのライセンス交渉に際しては、指導を受けつつこなしており、ライセンス・アソシエイトに求められる能力の高さを痛感し、これからも実際の技術移転活動を通じて、スキルアップを図っていきたいと感じた。

4. 成果

技術移転活動の目的・概要

1998年のTLO法案制定により、日本では大学等の研究機関での研究成果を積極的に産業界に移転し、活用することを国を挙げて奨励してきている。この流れを受けて知的財産戦略大綱、知的財産基本法の制定、さらには本年2004年4月からの国立大学法人化等、知識社会を目指した社会インフラの整備は急速に進められている。

こうした中で、実際に大学で行われている研究成果の特許等で権利化し、産業界にライセンスをする機関として設立されたのが、現在全国で37機関ある承認TLO(技術移転機関)である。

TLOにおいて技術移転活動を行うライセンス・アソシエイトとして、必要な実務能力を身に付けることが、今回のカリキュラムの目的である。

具体的な技術移転活動としては下記に示す一連の業務(図1業務フロー)を、指導者に同行・助言を求めるなどのOJT(on the job training)によって行った。

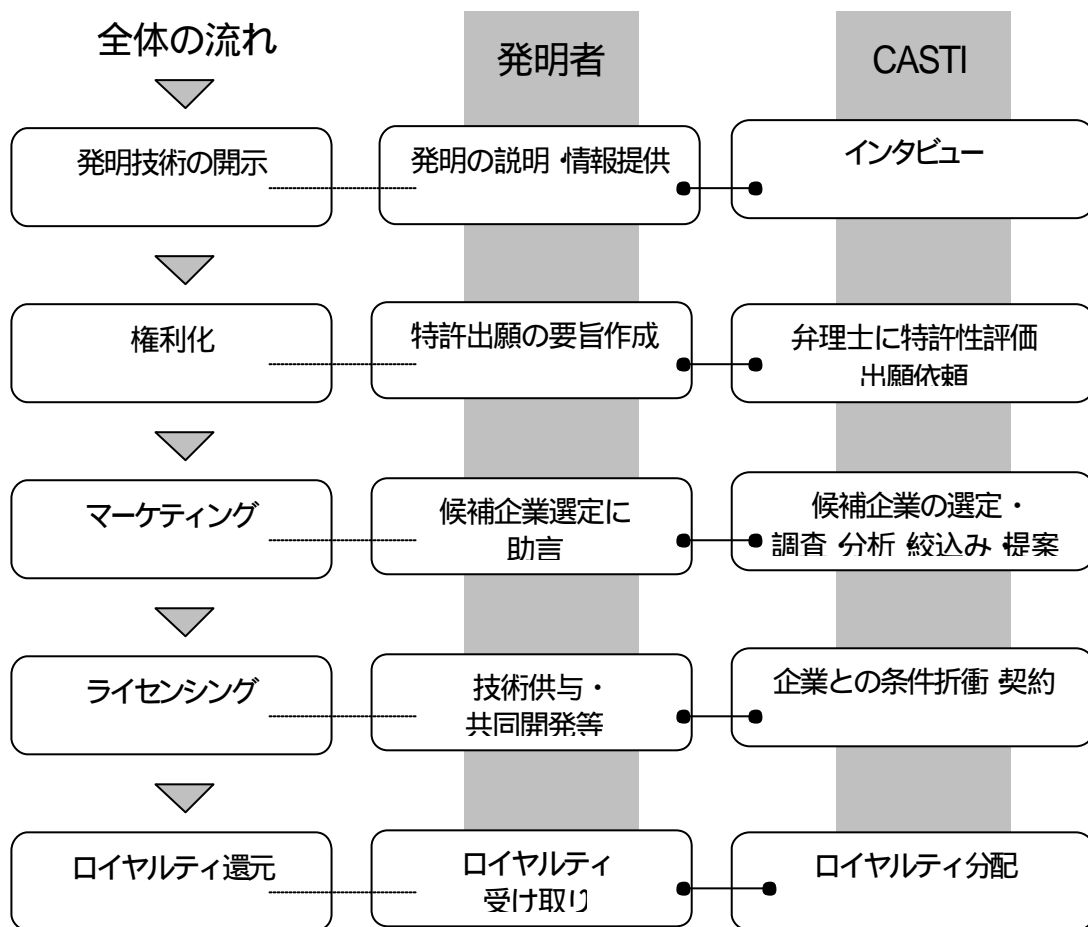


図1 業務フロー

成果について

図1の業務フローで示した技術移転業務を実際に担当者として行うことで、ライセンス・アソシエイトに求められる能力・知識を高めることができた。

(発明技術の開示)

研究者に対し、技術移転の社会的な意義を説明することで、研究者の知的財産に対する理解や関心をもってもらうよう努めた。また数多くの発明開示を受ける中で、経験的にサイエンスとして面白い研究成果と、ビジネスの面から関心が高い研究成果の判断がある程度、自身で出来るようになってきた。

また研究者に対し、共同出願の際のメリット・デメリットの説明や、発明の定義などを説明を行った。こうした中で、研究成果を市場性と特許性の観点から見る能力や、研究者への説明能力といったスキルが身についた。

(権利化)

特許や商標などの知的財産権の取得に必要な手続きの知識を得ることが出来た。実際に出願を依頼した特許事務所の弁理士と同行し、明細書作成に必要なインタビューを研究者に行う中で、ライセンスを前提とした明細書に求められる、請求項の範囲設定を学び、盛り込んで欲しい要望等を弁理士に伝えられるようになった。

(マーケティング)

発明技術を企業に紹介する際に必要な、プレゼンテーション能力や技術概要書の作成能力を高めることが出来た。どうすれば、発明技術のもつ可能性を企業担当者に感じ取ってもらえるのか、という観点で技術を紹介するように努めた。また企業に紹介する際には、こうしたTLOからの持込技術の担当窓口となるキーパーソンを探すことにも注力し、次回のマーケティングに繋がるよう、企業担当者との人脈作りにも努めた。

(ライセンス)

ライセンス条件等の企業担当者との交渉の場面では、条件を複数案用意して交渉に臨むなどのテクニックを身に付けることが出来た。また、契約書案のやり取りでは相手の企業側の意向も踏まえた上で、研究者の立場を不利にしないよう文言のやり取りを行った。こうした契約書作成において必要な特許法・商法の知識を高めることが出来た。

また海外企業へのライセンスも実際に何件があり、英文の契約書作成や英文メールでの交渉を行った。

実際の業務を通じて、ライセンス・アソシエイトとして必要な能力である、対人コミュニケーション能力・技術に基づいた提案能力の2つはこの1年で大きく伸びたと思う。

大学研究者と企業担当者間に立ち、双方の言い分を調整しまとめていくこの業務には、双方からの信頼が不可欠であり、対人コミュニケーション能力の必要性を強く実感している。また、技術に基づいた提案力としては、大学の研究成果は企業から見れば基礎的なものが多く、プレマチュアだと感じられることが多い。その際には企業でのさらなる開発・商品化プロセスを提案したり、公募研究費等の資金調達を提案したり、また研究者との企業開発者への技術指導の提案等、大学の研究と企業の間にある技術的な溝を埋める提案をする能力も必要である。

この1年のカリキュラムを通じ、ライセンス・アソシエイトとしての能力の向上はあったが、まだ1人では不安な場面もあり、さらに経験を積みスキルアップを図りたい。

5. 成果の対外的発表等

特になし。

以上